

## 宝くじ

高尾 通興

先日、数人で雑談しているとき、高額当せん金の宝くじが話題になった。すると高齢の女性が、

「私、このまえ宝くじが当たったんよ」とさりげなく言う。「えっ」。みんなは驚き、羨望（せんぼう）の表情を浮かべた。

私は宝くじを買うことはほとんどない。買った記憶があるのは数年前のこと。それは売り場に出来た行列に好奇心がかられたからである。そもそも夢を買うというが、金で買えるものなど欲しくない、とうそぶいている。

「いくら当たったの?」。他の女性が妬（ねた）むような好奇心をむき出す。

「1万円。全部義援金に寄付した」

急に場が和らぐ。1円でも浮かそうとするのは家計の鉄則。余裕がある方とはいえ、感銘した。宝くじに当せんすれば、寄付してもよいと思った。

そんな折、高額当せん金宝くじの発売がテレビのコマーシャルで流れ始めた。先日、話題になったこともあり、目によく留まるようになっていた。

ある日、自転車を押しながら倉敷・美観地区を通行していると、「宝くじは今日が締め切り」という観光客の会話が聞こえてきた。そういえば、コマーシャルで知った発売締

め切り日は本日15時である。

スマホを見ると14時ちよつと過ぎ。どういふ訳か、急に買わねばという焦りが走った。思いついた売り場は茶屋町。ここから10キロ近く離れている。猛烈にペダルを踏んだ。道中、100万円当たれば全額寄付は惜しいので10万円にしよう、などと考えながらぶつ飛ばす。高尚な考えはどこへやら、浅はかにも金の亡者に変身したのである。

どうにか間に合い、自転車置き場に止めて売り場に急ぐ。息は上がらないが、酸素不足で頭がぼんやりしている。

3000円で買った10枚を大事にポケットに納め自転車置き場へ着く。ポケットを探すと鍵がない。あわてて売り場へ引き返すと、拾って預かってくれていた。それなのに、「運」も一緒に落とした気がして、感謝よりも落胆の方が大きかった。

「まあ、いいか。どうせ当たらないし、少額なら全額寄付するのだし」と負け惜しみ。

脳に酸素が補給され落ち着いてきた。この騒動は何だったのだろうか? 冷静になると、欲望を持つ一庶民であることを自覚した。

10キロ近くを自転車で走った気力と体力が高額当せんに勝ると自分に言い聞かせる。

欲望は大切な生きがいなのである。

作者 高尾通興

題名 宝くじ

山陽新聞夕刊

2019.5.16 掲載